

# QT短縮症候群

## ① SQTsとは

- ① QT短縮症候群とは、心電図においてQT短縮を特徴とし、VTやVFという危険な不整脈が出現して、失神や突然死を来す症候群である。  
10～20歳代の突然死が多く報告されており、小児期での診断が重要である。
- ② QT短縮症候群はきわめてマシな疾患であり、文献上では130例以上が報告されているに過ぎない。  
QT短縮のカットオフ値に関して、今後も検討が必要である。
- ③ 心電図でQT時間が短縮しており  
男性で $QT_c < 350\text{ms}$   
女性で $QT_c < 360\text{ms}$   
でQT短縮とされる。  
 $QT_c < 330\text{ms}$   
でQT短縮症候群である可能性が高くなる。  
(2015年欧州心臓病学会のガイドラインでは、 $QT_c \leq 340\text{ms}$ がSQTsとなる。)
- ④ 先天性QT短縮症候群は、これまでに6個の原因遺伝子が報告されている。心臓の電氣的興奮を作り出すイオンチャネルというイオンを通す孔の異常によって、活動電位持続が短縮し心電図でQT時間が短縮する。  
イオンチャネル異常により、内向きCa電流の減弱や外向きK電流の増強が起こり、再分極が早まる。不均一な再分極に伴うphase2reentryがVTやVFの引き金になると考えられる。  
最も多いQT短縮症候群1型(SQT1)の遺伝子異常は25%程度に認められるが、その他の遺伝子の検出頻度は低くなる。(10～20%)
- ⑤ 後天性(二次性)QT短縮症候群としては、次のようなものがある。
  - ① 高K血症、高Ca血症
  - ② 心筋虚血
  - ③ ジギタリス効果
  - ④ アシドーシス
  - ⑤ カテコラミン
  - ⑥ 発熱